

研究課題 中世後期ロンドンの「外国人」と市民たち

研修期間 2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 26 日

研修先機関・身分 ロンドン大学歴史学研究所 Visiting Fellow

はじめに

中世後期のロンドンには、北西ヨーロッパにおける交易の中心地であった。交易に携わった商人たちだけでなく、職人や芸人なども、ブリテン諸島や大陸ヨーロッパの各地からロンドンを訪れた。彼らのような、中世ロンドンにやってきた「外国人」に注目することは、ロンドンの都市社会を「外」との接点という視点から見直すことにつながるだろう。また、「外国人」とされた人々を取り上げ、「外」との接点をさぐることは、都市社会が「他者」をどのように認識したかという問題につながり、中世ロンドンに生きた人々のアイデンティティにも関わる問題である。

以上のような問題関心をもち、私は、科研費の助成を受け「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」（2016 年度～2018 年度、基盤研究 C）の研究を行ってきた。本研究は、この研究の延長線上に位置する。

本研究で扱う、ロンドンの「外国人」とは、イングランド以外の土地からロンドンにやってきて一定期間滞在した人々や、ロンドンに移り住んでそこで生涯を終えた人々である。そういった人々は、史料では alien と記された。2019 年度のロンドン大学歴史学研究所での研修においては、まず、これまで整理してきた研究上の問題点について考察し、イギリスにおける最近の研究成果を検討することとした。そのうえで「外国人」出身地および居住地に関する調査、史料調査を行った。

## 1. 研究動向

### 1-1. England's Immigrants プロジェクトとそれに関連した最新の研究について

ロンドンに居住した「外国人」に関する研究は 1970 年代から行われてきた。その研究動向については先に論文にまとめたが<sup>1</sup>、ここ数年の間に、中世イングランドにおける「外国人」というテーマは、あらためて注目されてきている。その中でも大規模なプロジェクトが、

---

<sup>1</sup> 拙稿「中世後期ロンドンの「外国人」をめぐって」『大妻比較文化』17号(2016年)、pp. 35-54.

2012年～2015年に行われた England's Immigrants 1330-1550: Resident Aliens in the Late Middle Ages (以降 England's Immigrants プロジェクトと略記) であった。このプロジェクトでは、「外国人」を対象とした税額査定記録や、デニゼーション開封書状、保護状などの史料群にあらわれる「外国人」情報(姓名、出身地、居住地、職業、家族構成など)が網羅的に調査された。結果として計 64000 件を超える「外国人」の情報が収集され、データベースとして公開されている<sup>2</sup> (以降 England's Immigrants データベースと略記)。データベースの公開以来、主にこのプロジェクトに関わった研究者たちによって研究成果が次々と発表されてきた。

2018年には論文集 *Resident Aliens in late medieval England* が刊行された<sup>3</sup>。この論文集の第1部では、England's Immigrants プロジェクトで中心的役割を果たした研究者である M. W. オームロッドと J. マックマンによって、「居住外国人」という研究上のカテゴリーが提示され、England's Immigrants データベースの詳細が示された。この論文集の第2部と第3部には、このデータベースを利用した事例研究が収められている。スコットランド人、イタリア人などの「外国人」グループに注目した研究、リンカンシャー、エクセターなど特定の地域に注目した研究などが収められている。イタリア人を取り上げた研究では、ロンドンとサウサンプトンが取り上げられ、2都市間のイタリア人の移動や、少数ではあるものの都市に定着したイタリア人の例が紹介された。「外国人」がイングランドにやってきてどう生きたのかを考えるにあたり、提示された個々の事例は興味深いものであった。しかし、本論文集からは、当該データベースの問題点も浮かび上がってくる。この論文集に収められた論文はいずれも、England's Immigrants データベースから得られる「外国人」情報を整理して概要を示したうえで、個々の事例を紹介しているが、データベースの情報整理は複雑で分かりにくい。その背景には、データベースにおいて、現代の用語と、中世の史料上の語とが混在しているという問題があるように思われる。

その後、2019年には *Immigrant England, 1300-1550* が刊行された<sup>4</sup>。England's Immigrants プロジェクトに関わったオームロッド、マックマン、B.ランバートにより執筆されたものであり、上記の論文集に比べると一般の読者を意識したものとなっている。注目すべき点は、

---

<sup>2</sup> England's Immigrants 1330 – 1550 Resident Aliens in the Late Middle Ages (<https://www.englishimmigrants.com/>, 2020年3月29日参照。)

<sup>3</sup> W. Mark Ormrod, Nicola McDonald and Craig Taylor eds., *Resident Aliens in Later Medieval England*, Studies in European Urban History 42 (Turnhout, 2017).

<sup>4</sup> W. Mark Ormrod, Bart Lambert and Johathan Mackman, *Immigrant England, 1300-1550*, (Manchester, 2019).

本書のタイトルに alien ではなく immigrant という語が用いられたことである。著者たちは序論において、イギリス史における「移民」といえば、16 世紀半ば以降のユグノーを起点として検討されることが多いが、実はそのずっと前から、イギリスにはヨーロッパ各地から人々がやってきていたのだと述べる。そして、著者たちは、本書では中世イングランドへの「移民の第一世代」を対象とするという。本書では England's Immigrants データベースを出発点として、多様な「外国人」の姿が描き出されている。

2019 年には本書の書評が学術誌に掲載されたが、そこでは、教育現場における本書の利用への期待感も述べられていた。2019 年、EU 離脱問題に揺れていたイギリスにおいて、中世以来の大陸ヨーロッパとの結びつき（断絶ではなく）を、広く一般読者に伝えようとしたことが評価されているといえるだろう。そして、広く一般読者を意識した結果、alien という語の持つ差別的意味合いが読者に与える影響が考慮され、immigrant という語がタイトルに採用されたと推察される。しかし、immigrant という英語は、現代の研究上の用語である。中世の史料で「外国人」を指して使われることはなかった。オームロードらも序論において書いているように、immigrant の語源は古典ラテン語であるが、英語では 18 世紀になるまで immigrant という語は使われていなかった。この本では、具体的に中世の「外国人」について論じ始める第 2 章以降、immigrant という語は姿を消し、史料上の用語である alien が多用されている。

この本を読みながら、「外国人」というテーマを扱うことに伴う問題について、あらためて考えさせられた。現在のイギリスでは、中世のことであれ「外国人」を扱うということには注意が必要である。「外国人」研究は、中世の「外国人嫌悪」と結びつくものであり、現代における問題とも安易に結び付けられてしまう恐れがあるといえるだろう。私は、「外国人」に注目することで中世ロンドンに暮らした人々の多様なアイデンティティを見ていきたいと考えているのだが、このような危険性を意識したうえで論じていく必要があると痛感した。

## 1-2. 「外国人」とは誰かという問題

「外国人」研究にともなう問題としては、「外国人」の定義に関わる問題もある。これまでの研究から、イングランドでは、中世後期から、イングランドの他都市や地域出身の「よそ者」とは区別して、「イングランドの外から来た人々」が意識されていたことが判明している。中世イングランドで「よそ者」を指して用いられた語には strange、foreign、alien などがある。strange と foreign は「よそ者」一般を指して用いられたが、14 世紀半ば以降 alien は「イングランド以外の地域の出身者」「イングランド王の支配領域外の出身者」を指して用いられることが多かったのである。たとえば、中世ロンドンにお

ける同職ギルド研究で知られるマシュー・デイヴィスは、2019年の論文で、alienとは「イングランド王国の外で生まれた人」を指した語であり、foreignとは区別されていたと明確に述べている。また中世ロンドンにおいてforeignとは、「ロンドン以外の地域から来た人で、ロンドンの市民でない人」を指して使われたと述べている<sup>5</sup>。

史料上に alien と呼ばれる人々が現れるのは、イングランド王の領域以外の土地からやってきた人々がイングランド内で商業活動を行った時である。13世紀以前から、「外国人」商人の保護状が王権から出された記録が残っている。13世紀末からは、対仏戦争の中でイングランドに居住するフランス人の保護を目的として、尚書部が保護状を付与するようになった。14世紀後半以降、尚書部によって作成されるようになったのがデニゼーション開封書状 (letters of denization) である。15世紀になると「外国人」を対象とした特別税(alien subsidy)が課されることとなった。ここで重要なのは、実際に誰が「外国人」とされたのかは、時と場合によって変わったということである。たとえば、大陸ヨーロッパにおけるイングランド王の支配領域の出身者たちは「イングランド王の臣民」であり「外国人」ではないと考えられるが、実際に彼らがイングランドで商業活動をする際には王の保護状を得たり、デニゼーション開封書状を得ることが多かったのである。また、「外国人」臨時税の範囲は頻繁に変更された。たとえば、アイルランド人は1440年の臨時税では課税対象だったが、その後、課税対象から外されることになった。ハンザ商人は、1440年の臨時税導入当初は課税対象だったが、その後すぐに対象外となった。このように、「外国人」の範囲は変わりうるものである。

このような「外国人」の範囲の曖昧さについてはこれまでの研究成果の中でも指摘してきたが、2019年9月に参加した15世紀史学会 Fifteenth Century Conference (エクセター大学にて開催)において、そのことをあらためて考えさせられた。この学会では2019年度の全体テーマがイングランドと海外との関係であり、「外国人」をテーマにしたセッション Alien Communities in England が行われた。このセッションでは、ロンドン、カンタベリ、エクセターという3都市における外国人についての研究報告が行われた。いずれの報告者も、England's Immigrants プロジェクトおよびデータベースを利用して研究を行っていた。特にロンドンの「外国人」を扱った報告では、社会学研究で使われる belonging という語を切り口に、「外国人」の都市への融合を論じていた点がユニークであった。また、各都市には、England's Immigrants プロジェクトでは使われなかった史料群

---

<sup>5</sup> Matthew Davies, 'Aliens, Crafts and Guilds in Late Medieval London', in New, E. A. and Steer, C. eds., *Medieval Londoners: Essays to Mark the Eighties Birthday of Caroline M. Barron* (London, 2019), pp. 119-47.

があり、それらから「外国人」の情報が得られるということも分かった。

このセッションの質疑応答では、「外国人」と「イングランド内を移動してきた人々＝よそ者」との違いについての質問があった。それに対して報告者たちは、「よそ者」一般については史料上の制約があるため扱うことができないと回答していた。確かに、ロンドンに残る史料群の中から、イングランドの他の場所から来た個々の「よそ者」の詳細な情報は見えてこない。その点では報告者たちの回答に納得できる。とはいえ、地方からロンドンへ来た人々との比較も検討事項としていく必要はあるだろう。地方からロンドンへの移動についての論文も見つかったため、今後の研究では、それらの研究成果も利用していきたい。

このエクセター大学で行われた15世紀史学会においては、イングランドと大陸ヨーロッパとの結びつきについて、他にも興味深い研究に触れることができた。また、オックスフォード大学教授のマルコム・ヴェール先生とお話させていただく機会を得て、中世後期イングランドと大陸ヨーロッパとの文化的結びつきについても情報交換したことも、たいへん有益であった。

また研修中には、ロンドン大学歴史学研究所のセミナーにも参加した。そこで中世・近世イングランド史を専門とする研究者たちと情報交換することができた。特に、2019年6月と7月に、アメリカから訪問していたマリアン・コワレスキ先生、エセックス大学のジャスティン・コルソン先生にお目にかかることができた。お二人とも中世後期の「外国人」に関する論文を書かれており、今後の研究に役立つ情報を得ることができた。特にコワレスキ先生は、England's Immigrants データベース作成に関わった方であり、その問題点についてもお話することができた。複数の史料を活用しながら、データベースの問題点を克服していく必要があるし、中世イングランドの「外国人」研究はまだ始まったばかりである、とのお話だった。

## 2. 「外国人」出身地および居住地に関する調査

上記1に示したように最新の研究論文を読みながら、England's Immigrants データベースの問題点について整理し、当該データベースを用いた調査を開始した。当該データベースでは、姓名、出身地、居住地、職業、史料の種類などから検索を行うことができる。しかし、先述のように、データベース使用には注意が必要である。まず、同姓同名の人物が複数の史料に出てくる場合、同一人物かどうかの判定はせず、別々のデータとなっている。同一人物が何年もの間記録されたと推察される例は多いため、かなりの数の「外国人」が二重に、あるいはそれ以上に多く記載されている。検索により得られる数字は「外国人」数ではなくデータの件数となることには注意が必要である。

また、データベースでは史料上の用語と現代の英語との区別がつきにくくなっている。ただし、全てのデータに、もともなった史料情報が記されているため、さかのぼって調査することは可能である。England's Immigrants データベースは、「外国人」研究を行う際の出発点として重要なものであるが、そこから得られる情報は、数値はあくまでもデータの件数であるし、出身地などの情報も、もとのデータがどのような史料であるのかを確認しながら使う必要がある。

このような留意点について整理したうえで、England's Immigrants データベースと、他の先行研究を利用して、ロンドンにおける「外国人」の出身地および居住地の概要を見ていった。ロンドンに暮らした「外国人」が、どこから来ていて、市内ではどこに住んだのかを整理した。税額査定記録は、多くの場合市区ごとに集められたため、居住地が分かるのである。なお、2019年には、中世ロンドンの地図が新たに刊行されたため、それも利用して、ロンドンの市区の入った地図を作成し、検討を行うことができた。England's Immigrants データベースで15世紀について見ていくと、イタリア出身者は、富裕な商人たちが多く暮らした市内中心部に居住していたことが分かる。その一方で、大陸低地地方・ドイツ出身者は市内全域で確認されたが、ハンザ商館スティールヤードのあるダウゲイト市区や、市壁の外に広がる市区に比較的多くの人々が居住したということができた。このような、居住地の傾向は、これまでにロンドン史研究において論じられてきたことと、概ね合致している。また、職業をみていくと、イタリア出身者はほとんどの人が商人であったのに対し、大陸低地地方・ドイツ出身者の大部分は使用人や徒弟であった。おおまかにではあるが、出身地ごとに、居住地や職業などに特徴があらわれてきた。この研究成果については、2020年に発行された『大妻比較文化』に、論文として発表した<sup>6</sup>。

### 3. 史料調査

個々の「外国人」とロンドンの市民たちとの関係性を見ていくために、彼らが残した遺言書の調査を行った。先行研究でも、中世ロンドンの遺言書史料は用いられてきた。たとえばシルビア・スラップは、イタリア人および大陸低地地方・ドイツの出身者（史料では'Doche'と書かれる）が、ロンドンで残した遺言書の一部を利用している。しかし、スラップは、遺言の内容の詳細は論じていないため、オリジナルの史料をあらためて検討する余地があると考えた。ロンドン市立文書館にそれらの遺言書が現存するため、別の文献も利用して現在の史料状況を確認した。「外国人」の名前は、史料によってその綴りが大きく

---

<sup>6</sup> 拙稿「15世紀ロンドンにおける「外国人」－出身地と居住地から－」『大妻比較文化』21（2020年）所収。

異なる場合があり、一部確認できない遺言書もあったが、スラップが利用した「外国人」遺言書は、ほぼ探し当てることができた。これらの遺言書には、家族への遺贈に加え、故郷の財産への言及や、ロンドン市内で「外国人」と関わりの深かった教会への言及がみられる。ロンドンに移動した後も、「外国人」たちは故郷とのかかわりを大切にしていたことが推察される。イタリア人については詳細な先行研究があるため、今後は、低地地方・ドイツ出身の「外国人」に注目して分析を行いたいと考えている。14世紀後半から15世紀にロンドンで作成された低地地方・ドイツ出身者の遺言書は、これまでに30通収集し、解説をすすめている。特にロンドンの市民たちとはどのような関係を結んだのか、という点から調査を進めている。

また、イングランドにおけるハンザ研究の第一人者でドイツ在住のスチュアート・ジェンクス先生とメールで情報交換を行った。その際、ハンザ商人の遺言書については15世紀前半までの分はジェンクス先生がすでに論文にまとめていると教えていただき、その論文を入手した。33通のハンザ商人の遺言書を扱っており、論文の付録には史料のトランスクリプションも示されている。今後、このハンザ商人の遺言書とも比較しながら、低地地方・ドイツ出身の人々の遺言書について分析を行いたい。

また、遺言書を残した人々のうち、他の資料（税額査定記録、デニゼーション開封書状など）に出てくる人々については、それらの情報を収集した。遺言書と他の史料とをあわせて検討することで、「外国人」がロンドン社会にどう接したのかということを考えていきたい。

おわりに

研修中には、新たに出版された研究論文や研究書を読み進め、学会や研究会等に参加して研究の方向性についても考えることができた。特に、ロンドン大学歴史学研究所におけるセミナーに参加したことで最新の中世史研究にふれることができた。4月から6月まではMedieval and Tudor London Seminarに、10月から12月はLate Medieval European History 1150-1550 Seminarと、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校の研究者たちが集まるセミナーに参加した。それぞれのセミナーで研究者たちと情報交換ができたことは大変有益であった。これらのセミナーでは、史料として遺言書を利用した研究報告もあり、史料分析にも参考になった。また、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校のキャロライン・バロン先生と、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジのデイビッド・ダヴレイ先生には、研修中に何度かお目にかかり、研究上の助言をいただくことができた。

ロンドン大学の先生方との対話を通して、人文学の専門的な知識を学部生に伝えることについてもあらためて考えさせられた。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジは2034

年に向けて教育と研究の融合を目標の一つとし、そのための事例研究が進められている。今後の比較文化学部での教育活動において、イギリスの大学における試みも参考にしながら、人文学の専門的研究を教育と結びつけることができればと考える。

また、中世に限らず、移民の歴史にも関心が広がり、2020年2月にはロンドン郊外のルイシャムの Migration Museum を見学した。イギリスにおいては、移民を扱う展覧会は行われてきていたものの、移民を主要テーマに据えた博物館としては、この Migration Museum が最初のものであるという。数年の準備期間を経て、ルイシャムのショッピングセンター内に2020年2月に開館したばかりであった。この博物館では、近現代イギリスにおける移民たちのライフ・ヒストリーを集積しようという試みに触れることができた。展示物はまだわずかであるが、移民一人ひとりの「語り」を中心に据えた展示が主体となっていた。この博物館については、今後の授業でも紹介したいと考えている。

また、2020年3月初旬にはロンドン南西部のワンズワースを訪問した。この地区には16世紀半ば以降、フランスからユグノーが多く移住してきた。彼らの墓所や教会跡を見学した。私の研究は、ユグノー以前の中世「外国人」に関するものであるが、ヨーロッパ大陸から移動してきた人々がどのような社会的つながりを築き上げていったのかを考える際にユグノー研究も参考になると考える。

その他にも、ロンドン以外の都市も訪問し、今後の授業で利用するための様々な資料収集を行うことができた。また、イギリスはEU離脱の是非をめぐって揺れ動いており、そのような時期にロンドンで過ごしたことは、貴重な経験となった。研修期間の最後に、コロナウィルス感染症の影響により、お世話になったイギリス人の先生方にメールでのご挨拶しかできなかったことは残念だが、先生方とはこれからも情報交換をしていきたいと考えている。また、この研修中に経験したことを、比較文化学部での授業にいかしていきたい。

最後に、今回の研修にあたり、ご協力・ご支援をいただいた大妻女子大学事務部の皆様と比較文化学部の先生方、助手の皆様から心から感謝申し上げます。